

Visitors towards New Zealand

Munehiko Asamizu

Hokkai Gakuen University of Kitami

New Zealand is noted as a country of immigration. The history of migration to New Zealand is closely related to geographical, political and social factors. 1,500 years ago, the source of migrants was limited to the Pacific and all immigrants were Polynesian. From 300 years ago, however, the immigration history began to show greater diversity after Dutch, British and French explorers visited New Zealand.

The idea of cultural pluralism, which developed to multiculturalism in the 1970 s, also affected immigrants. New Zealand's population has been formed by a continuous inflow and mixing of diverse ethnic groups and cultures. With the end of the WWII, New Zealand was positioned to exploit the expansion of industrialized capitalist production. The need for significant numbers of workers at various levels existed in expanding industries. Employers and the New Zealand government looked to South Pacific islanders as an additional source of labour.

In recent years, Asians have become an important part of new migrants. Current immigration policy enables a number of business migrants to enter, particularly from Taiwan, Hong Kong and Korea and they created new business for New Zealanders. The business investor category is designed to ensure that those with high quality business skills can gain entry to New Zealand.

Not only immigrants, but also a large number of visitors from all over the world come to New Zealand. Visitation of New Zealand is also characterized by multinational and the main nationality groups of new visitors are Japanese, Taiwanese, Korean, etc. Their consuming contribute to New Zealand's economy and some New Zealander try to learn visitors culture.

ニュージーランドへ向かう訪問者

朝 水 宗 彦

北海学園北見大学

は じ め に

ニュージーランドにおける多文化社会は、先住民であるマオリや植民地形成期に訪れたイギリス系移民、さらに第二次世界大戦後に顕著になった南太平洋諸島人やアジア系移民など、様々な人々によって形成されている。先住民や移民、難民といった人々はニュージーランドに永住または長期滞在しているが、情報や交通が発達した現代社会では、それ以外の人々も同国に訪問するようになった。本論では、ニュージーランドにおける観光客や留学生など、より短期間訪問する人々に焦点を当て、同国社会の多様性についてまとめた。

1. 太平洋国家ニュージーランド

イギリスへの依存度が高かった第二次世界大戦前とは異なり、ニュージーランドにおける国際関係は環太平洋諸国との結びつきが強くなっている。特に近隣諸国との結びつきが強く、1997年における輸出入は共にオーストラリアが首位である（表1）。輸出を見ると、2位の日本や韓国（5位）、中国（6位）、香港（7位）、台湾（8位）、マレーシア（10位）、シンガポール（11位）、インドネシア（13位）、フィリピン（14位）など、アジア諸国が上位を占めている。輸入でもまた、3位の日本や中国（5位）、台湾（7位）、サウジアラビア（9位）、韓国（11位）、マレーシア（12位）、シンガポール（14位）など、アジア諸国との強い関係が伺える。

経済的な交流だけでなく、人的交流も多様化が起りつつある。1997/98年度における移民数を見ると、イギリスが最も多いが、中国や南アフリカ、インド、西サモア、フィジーなどが上位に挙げられている（表2）。ただし、南太平洋諸国からの移民数は比較的安定しているが、アジア諸国の移民数は変動が大きい。たとえば、台湾の場合、1995/96年度に1万2,325人であった移民数が翌年度には664人にまで激減している。

なお、1999年における長期滞在者数を見ると、移民とは若干傾向が異なり、イギリスやオーストラリア、日本からの滞在者が多い（表3）。イギリスやオーストラリア出身者の場合、ニュージーランド国籍を取得しなくても雇用条件に不都合が生じにくいいため、国籍変更

表1 輸出入の総額と上位15カ国(1997年)

(単位: 100万NZドル)

国名	輸出	国名	輸入
輸出総額	21,124.9	輸入総額	21,996.8
オーストラリア	4,276.1	オーストラリア	5,517.6
日本	3,055.0	アメリカ合衆国	3,882.0
アメリカ合衆国	2,197.3	日本	2,592.2
イギリス	1,305.4	イギリス	1,116.9
韓国	943.4	中国	1,023.7
中国	582.6	ドイツ	911.6
香港	581.2	台湾	571.1
台湾	566.1	イタリア	481.2
ドイツ	538.1	サウジアラビア	444.1
マレーシア	509.1	カナダ	429.1
シンガポール	353.1	韓国	424.5
ベルギー	345.3	マレーシア	407.1
インドネシア	343.4	フランス	339.6
フィリピン	336.2	シンガポール	328.2
イタリア	321.4	スウェーデン	313.0

出典: 世界経済情報サービス編 (1998) 『ニュージーランド 経済・貿易の動向と見通し』
世界情報サービス, 18-19頁.

表2 主要出身地における移民数の変遷(1992/93-97/98年度)

(単位: 人)

出身地域	1992/93	1993/94	1994/95	1995/96	1996/97	1997/98
中国	2,316	2,058	5,742	5,445	4,950	4,220
フィジー	905	704	920	1,067	1,422	1,746
イギリス	3,907	4,753	7,297	5,352	5,500	4,840
香港	3,699	2,687	2,708	2,599	1,122	483
インド	1,084	1,568	2,838	3,633	2,311	2,433
イラク	66	333	1,261	2,100	759	493
韓国	2,991	3,289	4,554	2,665	579	592
マレーシア	1,698	1,004	668	533	253	337
フィリピン	597	473	835	1,448	872	776
西サモア	1,482	983	1,525	2,282	2,387	1,835
南アフリカ	958	4,244	2,661	2,312	3,607	3,366
スリランカ	515	822	1,274	1,410	601	747
台湾	2,827	3,601	7,573	12,325	664	537
トンガ	1,367	587	871	793	949	932
ユーゴスラビア	232	590	1,227	973	374	139
(参考) 日本	335	240	325	333	278	316
(参考) 総移民数	29,647	33,521	50,761	54,437	33,683	30,678

注: 移民数が1,000人を越える出身地を抽出.

出典: New Zealand Immigration Service ed. (2000) "People Approved Residence by Business Year", *Research and Information*, New Zealand Immigration Service, <http://www.immigration.govt.nz/>.

表3 地域別長期滞在者および移住者数 (1999年) (単位:人)

地 域	主 要 国 名	滞 在 ・ 移 住 者 数
オセアニア	オーストラリア	14,206
	フィジー	9,924
	トンガ	1,378
	西サモア	576
		1,120
ア ジ ア	中 国	16,430
	香 港	3,028
	イ ン ド	1,450
	インドネシア	1,541
	日 本	473
	韓 国	4,087
	マレーシア	679
	パキスタン	1,006
	フィリピン	181
	シンガポール	557
	台 湾	573
	タ イ	1,497
ヨーロッパ		338
	ド イ ツ	15,269
	アイルランド	521
	オランダ	308
	イギリス	374
北アメリカ		12,213
	カ ナ ダ	3,265
	アメリカ合衆国	847
その他		2,406
	南アフリカ	7,337
合 計		2,370
		56,534

注：1999年5月の年度締めにおける滞在期間12ヶ月以上の年間滞在者と移住者数。

出典：Statistics New Zealand ed. (1999) "External Migration", *Statistical Information*,
<http://www.stats.govt.nz>.

を行うものの割合がさほど高くない。主要な移民の送り出し国ではないが、日本からの滞在者の場合、商社の駐在員に加え、留学やワーキング・ホリデーのため長期間滞在するものが少なからず見られる。

ワーキング・ホリデーとは観光の一種であるが、半年や1年といった期間に渡って滞在するため、費用を補助的に調達するために現地で就労することが認められている。1998年におけるニュージーランド政府が発給した日本人のワーキング・ホリデー・ビザは3,904件であり、カナダ政府による4,008件の発給数に匹敵する¹⁾。同98年における日本人に対するビザの発給数はオーストラリアが7,841人で最大であったが、人口比ではニュージーランドの

1) オセアニア交流センター編 (1999) 『ワーキングホリデー in 韓国』三修社, 22頁。

受け入れが最も大きい。発給数が制限されているカナダやオーストラリアと違い、ニュージーランドへ向かうワーキング・ホリデー希望者は増加傾向である²⁾。さらに、日本からの長期滞在者には留学生や研究者が多いという特徴がある。1997年におけるニュージーランド在住の日本人長期滞在者は3,032人であり、そのうち1,455人が留学生や研究者とその家族であった³⁾。

2. 訪問者の傾向と多様性

移民や難民のように移住を目的としていないが、ニュージーランドを短期間訪問する人々がいる。短期訪問者は観光を目的とする者が多いが、1999年における訪問者数は153万人以上あり、5万6,530人の移民や長期滞在者の数を大きく上回っている(表4)。つまり、人口380万のニュージーランドにとって、観光客やワーキング・ホリデーによる訪問者、留学生などは社会的に大きな存在である⁴⁾。

表4 訪問者数と長期滞在者・移住者数(1995-99年)(単位:人)

調 査 年	訪 問 者 数	滞 在 者 ・ 移 住 者 数
1995 年	1,363,020	68,670
1996 年	1,457,370	81,540
1997 年	1,545,670	75,080
1998 年	1,461,420	61,470
1999 年	1,531,790	56,530

注: 訪問者は滞在期間12ヶ月以内の者、長期滞在者は12ヶ月以上の者を指す。

出典: Statistics New Zealand ed. (1999) "External Migration", *Statistical Information*, <http://www.stats.govt.nz>.

ニュージーランド統計局によると、1995年における海外訪問者は43億ドルの消費活動をしたとされ、ニュージーランド居住者による観光消費35億ドルを上回っていた⁵⁾。海外訪問者による消費活動は、同年における輸出による外貨収入の15.8%に相当する。この外貨

2) 1995年の時点では、オーストラリアにおけるワーキング・ホリデー・ビザの年間総発給数は4万2,000人、カナダにおける同ビザの年間日本人枠は3,500人であった。以上、オセアニア交流センター編(1997)『ワーキングホリデー in ニュージーランド』三修社、18頁。

3) (財)世界経済情報サービス編(1998)『ニュージーランド 経済・貿易の動向と見通し』世界経済情報サービス、34頁。

4) ビザが切れる前に帰国したワーキング・ホリデー滞在者や集中英語コースのみ受講した語学研修生の多くは滞在期間が12ヶ月未満になるので、訪問者に分類される。

5) Statistics New Zealand (1999) "Leisure and tourism", *Statistical Information*, <http://www.stats.govt.nz>.

収入は観光関連分野における5万8,000人の直接的な雇用と、6万人の間接的な雇用を生んだとされる。1999年における短期訪問者の内訳を見ると、50万人を越えている隣国のオーストラリアが圧倒的に多いが、アジア地域からの訪問者も少ない数ではない。特に、15万人の日本はアメリカ合衆国やイギリスなど、主要英語圏の国々に匹敵している(表5)。

1990年代におけるニュージーランドへの観光客誘致は、同時期のオーストラリアとは異なり、政府主導の大規模な観光政策によって行われたのではない。ニュージーランドでは1984年に労働党が政権を取った後、行政改革が進められ、国営企業の法人化が行われ

表5 地域別短期訪問者数(1999年) (単位:人)

地 域	主 要 国 名	訪 問 者 数
オセアニア	オーストラリア	581,508
	クック諸島	507,151
	フィジー	6,447
	フランス領ポリネシア	13,559
	トンガ	7,238
	西サモア	7,705
ア ジ ア		11,849
	中 国	352,594
	香 港	17,059
	イ ン ド	29,757
	インドネシア	5,735
	日 本	7,072
	韓 国	150,268
	マレーシア	27,382
	フィリピン	15,878
	シンガポール	4,620
	台 湾	28,611
	タ イ	41,816
ヨーロッパ		19,930
	デンマーク	295,523
	フランス	7,245
	ド イ ツ	7,737
	アイルランド	44,151
	オランダ	5,990
	スウェーデン	18,287
	スイス	8,920
	イギリス	11,603
北アメリカ		160,746
	カ ナ ダ	198,991
	アメリカ合衆国	32,301
その他		166,491
	アルゼンチン	103,086
	南アフリカ	4,857
合 計		15,005
		1,531,702

注: 1999年5月の年度締めにおける滞在期間12ヶ月以内の年間訪問者数。

出典: Statistics New Zealand ed. (1999) "External Migration", *Statistical Information*,
<http://www.stats.govt.nz>.

た⁶⁾。観光関連の国営企業も例外ではなく、ニュージーランド航空は1989年に6億6,000万ドルで売却され、ニュージーランド観光局はホテルなどの資産を1990年に7,385万ドルで売却した⁷⁾。1980年代から1990年代初頭にかけて、オーストラリアではクイーンズランド州政府などが日系企業の資金を使って大規模なリゾート開発を行なった。オーストラリアの連邦政府は観光省やオーストラリア政府観光局を中心に、マスメディアを活用した精力的な観光キャンペーンを行った。他方、行政改革期のニュージーランドでは法人化された国営企業によって採算の合う健全な観光政策が行われていた。

貿易の拡大や観光客の多様化などによって日本やアジア諸国との関係が密接になるにつれ、ニュージーランドにおけるアジア言語の学習者も増加しつつある。同国では、ラテン語とフランス語の受講生が減少している一方、日本語とマオリ語の受講者は増加している（表6）。特に日本語の人気が高く、1994年にはフランス語を抜き、中等教育における外国語受講者数の首位になったとされる⁸⁾。バブル経済の破綻後、日本語の人気は低下するといわれたが、それでもなお安定した人気を保っている⁹⁾。

表6 中等教育における言語別受講者数（1972-92年）

（単位：人）

言 語	1972年	1977年	1982年	1987年	1988年	1989年	1990年	1991年	1992年
中国語	***	***	***	***	***	61	2	64	180
英語	166,680	229,181	218,537	226,422	226,411	226,041	225,375	220,912	225,372
フランス語	44,774	40,808	34,520	31,006	31,008	31,275	28,964	27,720	26,409
ドイツ語	5,550	8,026	9,003	8,300	8,614	8,500	9,008	9,009	9,395
インドネシア語	***	***	243	191	337	152	150	151	140
日本語	***	1,771	1,677	5,921	7,868	10,039	12,442	15,921	19,738
ラテン語	6,843	6,671	5,286	3,798	3,669	4,242	3,228	3,011	2,828
マオリ語	4,294	13,013	14,048	21,395	22,191	18,909	19,470	19,818	22,303
太平洋諸島諸言語	***	***	***	5	38	539	192	606	***
ロシア語	136	***	201	258	254	279	177	191	207
スペイン語	***	***	42	97	133	218	268	256	856

出典：Beal, Tim ed. (1994) *Educating for Asia*, Victoria University of Wellington, Wellington, p. 27.

日本に興味を持つニュージーランド人の生徒や学生が増加する一方、ニュージーランドに関心を持つ日本の教育関係者も増えつつある。海外の社会や文化を理解するために、修学旅行を行っている中学校や高校が目立つようになったが、ニュージーランドもまた有力な旅行先の1つである。

6) 大宮 侯一、大浦 一郎 (1995) 『ニュージーランドの財政金融』世界書院、15頁。小さな政府を目差した民間主導の行政改革は、当時の大蔵大臣であるロジャー・ダグラスを中心に行われた。

7) 同上、77-78頁。

8) Beal, Tim ed. (1994) *Educating for Asia*, Victoria University of Wellington, Wellington, p. 27.

9) 並木 淳、森 義仁 (2000) 「シンプルでのびのびとした学生生活」『テババ通信』Vol. 7、ニュージーランド観光局、12頁。

旧日本植民地を除くと、日本から海外への修学旅行は1902年に岡山県の関西中学校が優秀な生徒を選抜してアメリカ合衆国へ連れていったことが最初であるといわれる¹⁰⁾。1983年に日本航空が「修学旅行特別運賃制度」を発足し、翌年福岡県教育委員会が公立校の韓国修学旅行を許可して以来、日本から海外へ修学旅行で訪れる者が増加している¹¹⁾。さらに、1987年に運輸省が年間海外旅行者数を1,000万人に増加させる「テン・ミリオン計画」を発表し、修学旅行もその対象となったことは日本人生徒の海外訪問にとって追い風となった。1999年度に日本から海外へ修学旅行に行った中学生と高校生の合計は17万4,383人に及ぶ。そのうち、ニュージーランドへ訪問した者は7,216人であり、4万人を超える韓国や2万6,395人には及ばないものの、ハワイに訪れた7,970人に匹敵する¹²⁾。ニュージーランドを訪れた中学生を地域別に見ると、東北140人、関東404人、中部38人、近畿36人、中国31人、四国13人、九州100人であり、東日本が多い。他方、高校生を地域別に見ると、東北117人、関東763人、中部31人、近畿、522人、中国69人、九州4,952人であり、九州が突出している。

『トラベルジャーナル』誌が2000年2月に全国385の高校を対象にして行ったアンケート調査によると、実際に訪問したわけではないが、海外のなかで修学旅行の訪問先として興味のある国は上位からオーストラリア(12.7%)、カナダ(12.5%)、中国(11.3%)、ニュージーランド(6.9%)、アメリカ合衆国(6.6%)であった¹³⁾。ニュージーランドは比較的高い人気を持っているが、日本から同国へ訪問するためには、北米やヨーロッパと比べると割高な航空運賃や少ない情報が障害になっている。この障害をなくしていくことは、修学旅行に限らず、観光やワーキング・ホリデーなどでニュージーランドに訪問する人々を増加させるために重要な点であろう。

3. ニュージーランド多文化社会における観光形態

交通の便が良くないにもかかわらず、ニュージーランドは観光客にとって人気の高い場所である。ニュージーランドへ観光客を引き寄せる吸引力は同国が持つ観光資源の魅力であるが、自然的、人文的に多様性を備えている。

ニュージーランドにおける観光地といえば、雄大な自然をイメージする者が多いと思われ

10) トラベルジャーナル編(2000)『海外修学旅行マニュアル』トラベルジャーナル、9頁。

11) 同上、10頁。

12) 同上、11頁。

13) 同上、17頁。なお、6位から10位までは以下のようになっている。韓国(6.4%) イギリス(6.4%)、ハワイ(5.9%)、フランス(4.6%)、シンガポール(4.5%)。

る。ある者は、南島ワカティブ湖に臨む同国屈指の山岳リゾートであるクイーンズ・タウンとそこで行われる、スキーやフィッシング、ラフティング、バンジー・ジャンプなどの野外活動を思い浮かべるだろう。またある者は南島南西部にあるフィヨルドで、入り江の両側に1,200 mを超える絶壁がそびえ立つミルフォード・サウンドを絶賛するかもしれない¹⁴⁾。北島を訪問した者は、オークランドの南200 kmにある洞窟で、ツチボタルの生息地として知られているワイトモ鍾乳洞を代表的な観光地に挙げるだろう¹⁵⁾。

ただし、ニュージーランドにおける牧歌的な生態系は原生のままではなく、極めて人工的である。移民の国であるニュージーランドには外来の動植物が少なくない。タロイモの一種でマオリの主食の1つであるクマラは、彼らがニュージーランドに渡航した時に持ち込まれた。キウィ・フルーツは中国南部が原産とされ、メリノ種のヒツジはスペインで品種改良されたものである。ヒツジが草をはむ牧場もまた、森林を切り開いて牧草を移植した結果として形成された。

次に、ニュージーランドを「南半球の英国」として捉える者も少なくないだろう。たしかに、クライストチャーチは英国よりイギリスらしい「庭園の町」と呼ばれ、2月半ばに大聖堂広場やエイボン川河岸でフラワー・フェスティバルが開催されている。同市にあるカンタベリー博物館は1870年に創設され、開拓時代の街並みを再現したものやスコットとアムンゼンから始まる南極関連のコレクションが見所になっている。同じく南島のダニーデンはスコットランド系移民が作った街として知られ、スコットランド長老派の教会が立ち並んでいる。

しかしながら、多民族が共生するニュージーランドには、上記以外にも魅力的な観光資源が多数存在する。たとえば、イギリス系以外の多様な移民文化もまた、観光産業の発展に貢献している。ニュージーランドの土産物として人気が高まりつつあるワインであるが、同国におけるワイン産業の発展には、第二次世界大戦後に旧ユーゴスラビアのダルマチア地方から大量に移住してきた移民の役割が大きい。ニュージーランドでワインが本格的に輸出され、海外でも高い評価を受けるようになったのは1970年代に入ってからであるが、30年後にはイギリスやカナダ、アジア諸国などで需要が高まっている¹⁶⁾。旧ユーゴスラビアからの集団移民は1950年代半ばにオークランド西部を中心に行われ、1966年にはギリシア系の集団移民がウェリントンで行われた¹⁷⁾。さらに、近年ではアジア諸国からの移民の活躍が著しく、

14) ミルフォード・サウンドは1904年にテアナウ湖と共にフィヨルドランド国立公園に指定された。

15) ワイトモ鍾乳洞は1887年にフレッド・メイスによって発見された。

16) ニュージーランド観光局編(2000)「味わいNZ WINE」『テパパ通信』Vol. 7, ニュージーランド政府観光局, 3頁。

17) 平松紘他(2000)『ニュージーランドの先住民マオリの人権と文化』明石書店, 186頁。

中国系移民やインド系移民などのように外食産業で多に貢献している移民も見られる。

4. 観光のなかのマオリ文化と環境保護運動

多文化社会の人文的な魅力を最も象徴するものは、先住民であるマオリの文化の活用であろう。パケハがマオリ文化に対して関心を持ったのは新しい話しではない。マオリ文化の活用は、比較的古い時点から、イベントや観光地開発と強く関連している。同国では小規模な博覧会が1865年5月にダニーデンで行われ、1885年に政府の予算に基づくより規模の大きな博覧会がウェリントンで行われた。さらに政府による博覧会は、1889年にダニーデンで行われたが、この時すでにマオリ関連の展示が含まれていた¹⁸⁾。マオリの生活文化を再現して観光客に見せるという形態もまた、比較的古くから行われている。温泉地として内外に知られているロトルアでは、1902年に観光・健康リゾート省 (Department of Tourism and Health Resorts) によってマオリ村が導入されている¹⁹⁾。現在でもロトルアにあるタマキ・マオリ村では、マオリの伝統的な生活の再現や、集会場でのマオリ舞踊が行われており、国内外の観光客に高い評価を受けている。

さらに、ハンギ (hangi) と呼ばれる伝統的なマオリ料理も観光客によく知られている。ハンギは地中に穴を掘った炉 (=ハンギ) に焼いた石を入れ、豚肉や魚介類、野菜などを蒸し焼きにするが、ロトルアでは地熱を利用することが多い²⁰⁾。マオリ観光と工芸品は密接な関係があり、グリーン・ストーン (ニュージーランド翡翠) やパウア貝 (アワビの一種) など、地元原産の材料を加工したものは土産物として観光客の人気の高い。アスプレットとクーパー (Maggie Asplet and Malcolm Cooper) が1997年5月から12月までニュージーランド各地で行ったアンケートによると、調査対象322人のうち、140人が土産物を買う時マオリのデザインであることが重要であるとしている²¹⁾。この調査によると、マオリ・デザインへの高い人気は、若い世代で、イギリス出身の観光客に顕著であるとされる。

博物館や美術館へは多くの観光客が訪問するが、ここでもマオリ文化は重要な役割を演じる。1852年に創設された国立博物館であるオークランド博物館は豊富なマオリ・コレク

18) Allen, Ngapine (1998) "Maori vision and the imperialist gaze", in Barringer, Tim and Flynn, Tom eds., *Colonialism and the Object*, Routledge, London, p. 149.

19) Kirshenblatt-Gimblett, Barbara (1998) *Destination Culture Tourism, Museums, and Heritage*, University of California Press, Berkeley, pp. 163-164

20) ハンギは主に蒸し焼きの料理を指す。本来ならば、マオリ料理全般を指す場合は、マオリ・カイ (Maori Kai) と表現する。以上、平松 (2000) 『前掲書』184頁。

21) Asplet, Maggie and Cooper, Malcolm (2000) "Cultural designs in New Zealand souvenir clothing: the question of authenticity", *Tourism Management*, 21 (3), p. 310.

ションで知られており、マオリの戦闘用カヌーやモアの骨格標本などが展示されている。ウェリントンにある、1865年に創設され、1998年にリニューアルされた国内最大級の博物館であるテ・パパ・トンガレワ (Te Papa Tongarewa: 南風の吹く地を意味する) は、キャプテン・クックの遺品以外にも、興味深いマオリの彫刻類やカヌーなどを展示している²²⁾。博物館は死んだ動植物や使えなくなった人工物などを展示しているという静的なイメージがある。しかし、テ・パパ・トンガレワは、文化観光における擬似的な異文化体験の視点から、訪問者がニュージーランドをより良く理解できることを試みている²³⁾。

マオリによるホスピタリティはマナアキタンガ (manaakitanga) と呼ばれる。マオリ自身による観光ビジネスは規模的にはさほど大きくなく、1994年の時点では750万ドル程度であると試算されている²⁴⁾。しかし、物質的には豊かでないかもしれないが、手厚い独自のホスピタリティによって客人を家族のようにもてなすことは、至って好評のようである。

自然と共に暮らしてきたマオリの生活文化は、ニュージーランドの自然環境と緊密に結びついている。北島中央部にあるトンガリロ国立公園は元来マオリの聖地であったが、入植者による放牧が広まっていった。聖地を保護するため、マオリの族長であるツキノIV世が同地をイギリス女王に献上して王室の保護下に置くことを求めた²⁵⁾。苦渋の決断による先住民の要望により、同地は1894年にニュージーランド初の国立公園になった²⁶⁾。

南島のカイコウラはホエール・ウォッチングの観光スポットとしてよく知られているが、同地における観光の発展もまた、海洋民族であったマオリの役割が大きい。自然体験型の観光では、地元の自然環境を知り尽くしたマオリの役割が重要である。いくつかのヨーロッパ系の環境保護団体は、マオリの自然観を尊重することは環境保護の出発点になると理解している²⁷⁾。これらの例に見られるように、ニュージーランド観光におけるマオリの役割は大きく、ツェッペルによると1998年には230ものマオリ観光オペレーターがいるとされる²⁸⁾。

22) Thomas, Nicholas (1999) *Possessions Indigenous Art / Colonial Culture*, Thames and Hudson Ltd, London, pp. 246–247.

23) Kirshenblatt-Gimblett (1998) *op. cit.*, pp. 139–140.

24) Barnett, Shirley (2000) “Manaakitanga: Maori hospitality – a case study of Maori accommodation providers”, *Tourism Management*, 22 (1), pp. 83–84.

25) 井沢紀子 (1999) 「世界複合遺産を見る・歩く」『テパパ通信』Vol. 5, ニュージーランド政府観光局, 1頁.

26) トンガリロ国立公園は1990年に世界自然遺産, 93年に文化遺産に指定された.

27) 平松 (2000) 『前掲書』167頁.

28) Zeppel, Heather (2000) “Maori and Aboriginal tourism: research, marketing and development”, *Tourism Management*, 21 (2), p. 209.

お わ り に

ニュージーランドには、移民以外にも留学生や観光客などの滞在者が世界各国から訪問している。ニュージーランド社会の多様性は訪問者にとって重要な観光資源となっている。なかでもマオリの文化はそれ自体の魅力に加え、環境保護運動や自然を理解するための体験型の教育と結びつくことによりエコツーリズムやホエール・ウォッチングなど、自然に優しい新たな観光形態を発展させている。つまり、同国で最も古い文化が新しい産業と結びつき、多様な人々から注目を浴びているという興味深い現象が起こっている。

主要参考文献

- Barringer, Tim and Flynn, Tom eds. (1998) *Colonialism and the Object*, Routledge, London
Beal, Tim ed. (1994) *Educating for Asia*, Victoria University of Wellington, Wellington
平松紘他 (2000) 『ニュージーランドの先住民マオリの人権と文化』明石書店
Kirshenblatt-Gimblett, Barbara (1998) *Destination Culture Tourism, Museums, and Heritage*, University of California Press, Berkeley
Thomas, Nicholas (1999) *Possessions Indigenous Art / Colonial Culture*, Thames and Hudson Ltd, London